

# カミュ『正義の人びと』

— 『一テロリストの回想』との比較から —

播磨 チヅ子

## はじめに

カミュの『正義の人びと』 *Les Justes* は、ヴォリス・サヴィンコフの『一テロリストの回想』 *Souvenirs d'un terroriste* を下敷きにした作品であることは、誰もが知るところである。しかし、わが国では『正義の人びと』についての研究は、ほとんどなされていない<sup>1)</sup>。従って、カミュがいかなる創作意図をもって、『一テロリストの回想』から『正義の人びと』を創造したのか研究することは意義深い。

## I 『一テロリストの回想』の第二章と『正義の人びと』との比較から

『一テロリストの回想』は、社会革命党の戦闘団のサブリーダーだったサヴィンコフの著作であり、二部で構成されている。第一部は、第一章でプレーヴェの暗殺。第二章では、キャリアエフたちによるセルゲイ大公の暗殺までの苦心を語っている。1905年のこの暗殺事件が戦闘団の勢力の頂点であると共に退潮へと向かうターニングポイントともなった。第二部は同志たちによる多くの暗殺事件並びに彼らの爆死事件と逮捕が主な内容である。『一テロリストの回想』は、絶えず死に直面し、自ら死を選んだ革命家たちの活動を生々しく描写している。

カミュが『正義の人びと』の基として用いるのは、『一テロリストの回想』の第二章である。ここには、活動家たちの苦心が詳細に記述されている。両者を比較すると『正義の人びと』には『一テロリストの回想』の第二章を、(1) 踏襲した部分、(2) 省略した部分、そして新たに、(3) 書き加えた部分があることがわかる(「資料」参照)。以下で各々について述べる。

### 1 踏襲した部分

カミュ自身、『正義の人びと』の「著者の言葉」 *Prière d'insérer*、「『カリギュラ』と他三戯曲のアメリカ版の序文」 *Préface à l'édition américaine du Caligula and Three Other Plays*、「コメディ・ド・レストのための自薦文への追加」 *Ajout au prière d'insérer pour la Comédie de l'Est* でこの事件について、

J'ai seulement tâché à rendre vraisemblable ce qui était déjà vrai.

J'ai même gardé au héros des *Justes* Kaliayev, le nom qu'il a réellement porté. ( III, 57 )

と書いている。「資料」を見ると、カミュの言葉通り、大部分は事実のままを取り入れていることが分かる。つまり、カミュは自らの書き加えを必要最小限にして、史実から乖離しないようにすれば、自らの創作意図がより効果を発揮すると考えたのではなかろうか。

## 2 省略した部分

カミュは、カリーエフの獄中からの私信や裁判の意見陳述の部分は省略した（「資料」の具体的出来事の欄の下線の部分）。手紙はカリーエフの個人的な生活の告白であり赤裸々すぎた。又、裁判の意見陳述はいかに傑出している、中心は社会革命党の主義・主張である。従って客観的にはテロリストの論理であり、一党の教義は万人に共有できるものではないからである。けれどもカミュは、彼らの考えと行動の中に、時代を問わず、万国、万人に共通する価値を見出した。従って『正義の人びと』でその普遍的価値を明らかにし、それを賦与したいと願った。それこそがカミュを『正義の人びと』の創作へと突き動かした力である。この点については、ロジェ・キーヨは次のように指摘している。

Bref, il [= Camus] a débarrassé la pièce des emprunts trop directs qu'il avait faits au récit de Savinkov, sans doute pour donner à sa pièce une valeur plus générale et plus intemporelle.

( T, 1825 )

## 3 書き加えた部分

主人公たちの考えや行動をより真実に近いものにしたいと願って、カミュが書き加えた部分である（「資料」ではゴシック体の部分）。以下においてその部分の意味について述べてみたい。

### (1) カミュの主張について

カミュは、『ペスト (*La Peste*)』は「孤独な反抗 [[異邦人]] から、ある種の共同体の承認に至る過程を明らかにしている」と言う。

Comparée à *L'Étranger*, *La Peste* marque [...] le passage d'une attitude de révolte solitaire à la reconnaissance d'une communauté dont il faut partager les luttes.

( II, 286 )

では、この時期のカミュの主張を見る。

### a 〈連帯 (solidarité)〉の必要性

1943年、『ドイツ人の友への手紙』*Lettres à un ami allemand*でカミュは既に〈連帯 (solidarité)〉することを望み、次のように述べている。

Et moi, refusant d'admettre ce désespoir et ce monde torturé, je voulais seulement que les hommes retrouvent leur solidarité pour entrer en lutte contre leur destin révoltant. (II, 26)

そして、1947年、その〈連帯〉に強く踏み込んだ作品、『ペスト』を世に問う。そしてこの〈連帯〉というテーマは『正義の人びと』では、さらに深められていくことになる。

『ペスト』では、主人公リウーたちはペストの撲滅のために保健隊を組織して戦いを挑む。その保健隊への参加を強く促す場面で以下のように言う。

Tarrou : [...] dans nos formations sanitaires.

Tarrou : Ces formations ne vous paraissent-elles pas utiles?

Le journaliste : Très utiles. (II, 141)

つまり、ペストのような絶対的な暴力に対しては、個という反抗ではなく、〈連帯〉する必要がある、〈連帯〉に加わって戦わねばならないとカミュは考えている。さらにまたその絶対的な暴力に対する戦いは、

Rieux: [...] il faut être fou, aveugle ou lâche pour se résigner à la peste. (II, 120)

Rieux : Toujours, je le [= vos victoires seront toujours provisoires] sais. Ce n'est pas une raison pour cesser de lutter. Une interminable défaite. (II, 122)

と述べ、一時的勝利で戦いを止めてはいけない。それは際限なく続くもので、常に負け戦であっても、諦めたり放棄したりするわけにはいかないとリウーに言わせている。この主張はカミュの絶対的な暴力に対する戦いの基本姿勢である。この主張は、1955年の「ロラン・バルトへの手紙」の中で以下のように明確に述べられている。

S'il y a évolution de *L'Étranger* à *La Peste*, elle s'est faite dans le sens de la solidarité et de la participation.

Rambert, qui incarne ce thème, renonce justement à la vie privée pour rejoindre le combat collectif.

*La Peste* se termine, de surcroît, par l'annonce et l'acceptation des luttes à venir.

## b 限界の提示

『ペスト』では、オトン氏の小さな息子がペストに感染し、人よりも長い時間苦しんで死んでいく姿を目撃した医師リウーは、パヌルー神父に次のように言う。

Rieux : Celui-là, au moins, était innocent... (II, 184)

ここで、ペストの犠牲となる子供の無残な死を提示し、子供の死を容認できないのは、彼らが〈無垢 (innocent)〉であるからである。そのことを主人公は以下のように述べる。

Rieux : Je refuserai jusqu'à la mort d'aimer cette création où des enfants sont torturés. (II, 184)

罪のない子供が死ぬ世の中は絶対に許すことができないのである。ここに許容できる範囲が明確に示されている。

以上、一つ目は、絶対的暴力に対抗するには〈連帯〉する必要があるということである。二つ目は、無垢な子供の死を許すことはできないということである。これらこそカミュが、社会に強くアピールしたいことである。ではこの二つのことが『正義の人びと』においてどのように実現されているのかを見てみよう。

## (2) 『正義の人びと』においてカミュが付け加えた部分とその意味について

先ず、『正義の人びと』のあらすじを述べておく。

1905年2月、モスクワ。セルゲイ大公の暗殺事件を題材にした戯曲である。

主人公キャリアエフは勇んで大公の暗殺に赴く。しかし彼が爆弾を投げようとしたその瞬間、馬車に大公の甥たちが乗っているのを目撃し爆弾を投げるができない。この行為の是非をめぐって、彼のグループは厳しく意見が対立する。この激論の中から、破壊にも限界がある、子供を殺すことは無益だと彼らは結論付け、大公の暗殺をやり直すことにする（第一幕、第二幕）。二日後、キャリアエフたちは暗殺に成功する（第三幕）。キャリアエフは捕らえられ、投獄される。権力側は、恩赦を餌に仲間を裏切らせようと画策する（第四幕）。しかし、キャリアエフは信念を貫いて名誉のうちに絞首台の露と消える（第五幕）。

次に分析すべき箇所は「資料」のゴシック体、カミュが新しく書き加えた箇所である。それは、(1) ステパンという人物の登場（第一幕）、(2) カリヤーエフとドーラが愛を語る場面（第三幕）、(3) フォカ、スクラートフ、大公妃との面会の場面（第四幕）、(4) カリヤーエフの処刑を語る場面（第五幕）である。

### a ステパンという人物の登場

流刑地帰りのステパンは革命至上主義者で現実主義者である。ステパンは、爆弾を投げる役をカリヤーエフから奪うことを熱望し、自分なら大公の暗殺を一人で完璧にやりきると公言する。そこでカリヤーエフは、

Kaliayev, *violemment* : Tu ne le [= Grand-duc] tueras pas seul [...]. Tu le tueras avec nous [...].

(III, 12)

と激しい言葉をぶつける。この二人の対立はグループ全体に波及し、グループの結束が危ぶまれる。そのためリーダーのアネンコフは、それまで至極当前のことだった〈連帯〉することを、改めて仲間に強く促さざるを得なくなるのである。

Annenkov : Des frères, confondus les uns aux autres, tournés vers l'exécution des tyrans, pour la libération du pays ! Nous tuons ensemble, et rien ne peut nous séparer.

(III, 12)

この科白から、圧政者たちは、仲間が一心同体になって力を合わせなければ倒せない強大な力だと考えられていることがわかる。だから圧制を打倒するためには〈連帯〉が必要であるということが明確に確認されたのである。さらに、ステパンの意見と真っ向から対立することで、カリヤーエフや仲間は次のように明言する。

Annenkov : Mais quelles que soient tes raisons, je ne puis te laisser dire que tout est permis.

(III, 21)

リーダーのアネンコフは、これまでの革命運動で多くの同志が死んだけれどもそれは、革命という至上目的のためであっても使ってはいけない手段があったからであって、子供たちに爆弾を投げるのがその一つだと主張する。

Dora : Même dans la destruction, il y a un ordre, il y a des limites.

( III, 22)

ドーラも、革命のために破壊するのだとしても、それには順序や限界があつて、何

でもが許されるわけではなく、子供を殺すという方法は我々の意思や社会の秩序の限界を超えていると述べる。

Kaliayev : [...] tuer des enfants est contraire à l'honneur. ( III, 23 )

さらにキャリアエフは、自分は暗殺者ではないのだ、名誉のために革命に身をささげているのだと強調しているのである。

Annenkov : L'Organisation décide que le meurtre de ces enfants est inutile. ( III, 24 )

ヴォワノフは意見を述べないが、キャリアエフに賛成していた。結局ステパンに賛成する者は誰もいなかった。アネンコフのグループは、子供を殺すことは無益だと結論付けた。

このように、彼らはステパンの革命至上主義に反対することによって、目的を達成するための手段には許容できる限界がある、子供を殺すことはその許される範囲を超えることであることを明確に提示することができた。つまりステパンの、組織のためならなんだってできる、子供だって殺していいのだという主張、さらにまた、〈連帯〉は無用だという主張に、強硬に反対する場面を設けることができたのは、ステパンの登場に負うものである。

さらにまた、ステパンとの厳しいやり取りにもかかわらずグループは分裂を回避し、ステパンも最後には皆に屈服し全員で大公の暗殺を完遂する。

大公の暗殺についてドーラは次のように言う。

Dora : C'est nous qui l'avons tué ! C'est nous qui l'avons tué ! ( III, 33 )

特に、ここで二回も使っている「あたしたち (nous)」という言葉に、ドーラが、自分たちは目的を達成するために〈連帯〉したのだということをこれまで以上に強く意識していることが分かる。

### b カリヤーエフとドーラが愛を語る場面

愛を語る第三幕では、君を愛していると本音を言えないキャリアエフに対して、ドーラは以下のように迫る。

Dora : Ne vaut-il pas mieux aimer comme tout le monde ? ( III, 30 )

彼らのような閉鎖的な小グループの男女が恋愛に進むことは一般的なことだ。しかし組織は彼らに、それが革命への意欲を削いだり、仲間の結束を乱したりするという理由で厳しく禁じていた。違反者は厳罰に処された。従って秘密裏に愛を語るしかない。それでドーラは普通の男女の愛し方を望んだのだ。そして、ドーラは、

Dora : Tu m'aimes plus que la justice, plus que l'Organisation ? (III, 30)

と、革命家のキャリアエフが一番大事にしている正義や組織より自分を愛しているかと尋ねる。さらに不正義でも組織の一員でなくても愛してくれるかと次第にキャリアエフが返答に困る質問をして愛を確かめようとする。

Dora : M'aimerais-tu si j'étais injuste ? Dis-moi seulement, m'aimerais-tu si je n'étais pas dans l'Organisation ? (III, 30)

「不正義でも、組織の一員でなくても」ということは、戦闘団の一員としては断ずべき言葉である。しかしこの言葉から、ドーラが掟を破ること、さらには組織からの追放あるいは死をも覚悟していることが分かる。

それに対して、キャリアエフは、

Kaliayev : *il hésite et très bas* : Je meurs d'envie de te dire oui. (III, 30)

と、本心をのぞかせる。しかし、明日の暗殺決行を前にした二人は、愛することは不可能だと悟る。

戯曲にこのように愛を語り合う場面を設けたことで、過酷で、仮借のない世界に生きているテロリストたちが、実は、人を愛するという優しさや慈しみをもち尊敬し合っている人間であることを表現している。しかも又、彼らは死を免れない運命にもあるのである。だから禁じられた愛を、そしてこの世では決して結ばれない愛を貫こうとする二人に、観客は、悲劇を感じ、哀れみと同情を寄せる。

この場面を設けたことで、カミュはキャリアエフたちが人間味あふれるテロリストだったことを際立たせることができた。

### c フォカ、スクラートフ、大公妃との面会の場面

キャリアエフは各社会階級の代表者と次々に面会する羽目になる。

先ず人民の代表であるフォカを、「同志 (frère)」と呼ぶが、彼は死刑執行人とし

てキャリアエフを苦しめる存在で、共に革命を望む同志ではなかった。

次のスクラートフは警察庁長官で、権力を代表する人物である。大公の暗殺についてキャリアエフは、

Kaliayev : J'ai lancé la bombe sur votre tyrannie, non sur un homme.

J'ai exécuté un verdict.

( III, 38 )

と、圧政を倒したのであって殺人ではない、組織の決定を実行しただけだと叫ぶ。一方スクラートフは、殺人者は特赦される権利があると言って、特赦を餌に甘言を囁き裏切を求めてくる。

Skouratov : Je veux vous y aider. Par pure sympathie, croyez-le.

( III, 38 )

La grâce pour vous et vos camarades.

( III, 39 )

スクラートフは、「同志のための特赦」と言いながら、キャリアエフを使って彼の仲間を一網打尽にすることを画策している。

さらにスクラートフに操られて、大公妃も宗教界を代表して訪れる。殺人者ではなく、革命家として名誉ある死 [=絞首刑] を望んでいるキャリアエフに、

La Grande-Duchesse : Non [= Tu ne dois pas mourir]. Tu dois vivre, et consentir à être un meurtrier. [...] Dieu te justifiera.

( III, 42 )

大公妃は、殺人犯として生きて罪を償わねばならない、償いがあるこそ神の許しが得られると言って、恩赦を願い出ることにする。キャリアエフにとって最も不名誉な罪人として生きるようにしようとするのである。この大公妃との面接は権力側の罠であった。キャリアエフが恩赦を願い、仲間を裏切ったという噂が流される。

つまり、キャリアエフは、殺人犯として獄につながれていただけではない。孤独な状態に置かれ、さらに、三人の訪問者に、信じてきた組織の思想や活動を全否定される。さらに仲間を〈裏切る〉よう求められ、また仲間を裏切ったというデマを飛ばされることになった。従ってこの場面は、二重三重の耐え難い苦悩を押し付けられても、なお信念を曲げず、仲間を信じ、仲間を守り名誉ある死を求めるキャリアエフの孤高な姿を観客に焼き付けることができた。

#### d カリヤーエフの処刑を語る場面

この場面は、キャリアエフが裏切ったと主張するステパン・アネンコフとキャリア

一エフが裏切るはずがないと信じるドーラとヴォワノフの対立から始まる。ステパンは、

Stepan : Je souhaite que Yanek vive. Nous avons besoin d'homme comme lui. (III, 47)

と述べ、グループのためにキャリアエフの特赦を、つまり裏切りを強く望んでいるのだと言う。また、アネンコフは、

Annenkov : Il sera gracié. (III, 49)

と述べる。まるでキャリアエフが裏切ってもそれでもいいと言っているようである。二人には、キャリアエフの裏切りを認め、命ながらえて欲しいと願う気持ちが湧きあがっていることが分かる。二人はキャリアエフの翻意によって、自分たちが逮捕され命を落としても、彼の延命を望むほど強い「同志」の絆＝〈連帯〉を契っていることが分かる。

次にキャリアエフの処刑について語る場では、ドーラはステパンに処刑の様子を詳細に求める。が、この残酷なシーンを話すことはステパンとて躊躇する。だから、口ごもり、一句一句しか語れない。このステパンの話し方は、キャリアエフの有様をコマ送りのフィルムのように一つ一つ露わにする。

結局キャリアエフは、心から望んでいた革命家として名誉ある死を迎えることができた。だから処刑されるときにも、

Stepan : La même exactement. Moins la fièvre et l'impatience que vous lui connaissez. (III, 51)

のである。しかも、幸福そうでさえあった。

キャリアエフが、殺人者ではなく、革命家として死刑を受けたことは、テロリストたちの行為が正当化されたということにも繋がる。こうしたキャリアエフの態度からは、一つのことを終えた充実感と革命家としての誇りさえ感じられる。キャリアエフが殉教者として死んでいくという効果を生み出しているようである。

しかもまた、キャリアエフの後を追いたいと言うドーラの願いを、女性には爆弾を投げさせないという党の規則に反して、ヴォワノフもステパンもアネンコフも承知する。とりわけステパンは積極的に支持を表明する。しかもステパンは同志として、今回の困難な事柄を〈連帯〉してやり遂げた。そして、さらに強い結束力で、

次に向おうとするグループの姿を見ることができる。

従って〈連帯〉は困難な問題にぶつかる時にこそ、その力を発揮し、その問題を克服していく過程でより強固なものになっていくのだということも描き出すことができた。

このように、**a ステパンという人物の登場** では、ステパンを登場させることで、カミュが主張していた〈連帯〉の必要性和子供を殺すことは無益だという限界をより明確に示すことに成功している。さらに、**d カリヤーエフの処刑を語る場面** においては、カリヤーエフの〈裏切り〉と処刑という難局を乗り越えたときに、さらに〈連帯〉が頑丈になることが強調されている。そして、**b カリヤーエフとドーラが愛を語る場面**、**c フォカ、スクラートフ、大公妃との面会の場面**、**d カリヤーエフの処刑を語る場面** を通して、いかにしても死を免れない彼らの生き方やこの世では結ばれない愛で、悲劇を描いていることも見えてくる。これは、カミュの望んでいた現代の悲劇と言えるものである。何故ならそれは、1958年『フランス・ソワール』紙 *France Soir* と『パリ・テアトル』紙 *Paris théâtre* のインタビューで次のように答えてことでわかる。

Albert Camus : Le théâtre de notre époque est un théâtre d'affrontement, il a la dimension du monde, la vie s'y débat, y lutte pour la plus grande liberté, contre le plus dur destin et contre l'homme lui-même. (IV, 650 )

Albert Camus : [...], mais je voulais créer [...] le tragique. Plus tard, j'ai beaucoup réfléchi au problème de la tragédie moderne. *Le Malentendu, L'État de siège, Les Justes* sont des tentative [...] pour approcher de cette tragédie moderne. (IV, 578 )

## おわりに

『一テロリストの回想』のカリヤーエフたちのグループは、兄弟のような〈連帯〉で結びついている。そして革命を成功させるために子供を殺す手段は無益だと断じた。これは、カミュの主張そのものであった。従って、カミュはこの事件を題材にすれば、絶対的暴力に反抗するためには〈連帯〉が必要であることと、目的達成のための手段にも限界があるということ、一般的、普遍的真理にまで高めることができる考えた。そこで本戯曲が出来上がったのである。

最後に、カミュは1957年のスウェーデンのフランス大使館におけるスピーチの中で、

L'engagement de l'écrivain, [...] ce n'était pas un acte volontaire, mais un «service militaire obligatoire»<sup>3)</sup>.

と唱え、『正義の人びと』に込めた考えの通り、その生涯をかけて、あらゆる暴力に戦いを挑み続けた。

そのことは「自由の旗のもとに」*Sous le signe de la liberté* の言葉でも裏付けられる。

[...] il n'est peut-être pas mauvais qu'un écrivain, [...] dise tout droit sa conviction réfléchie et déclare qu'il combattra librement, dans ses articles, pour la liberté d'abord. (Ⅲ, 1036)

あるいはまた、カミュは 1956 年 1 月 22 日にアルジェに赴き、「市民休戦のための呼びかけ」*Appel pour une trêve civile en Algérie* の集会を行ったことでも、さらに「引き裂かれたアルジェリア」*L'Algérie déchiré*、『レクスプレス』*l'Express*、1955 年 10 月 16 日に多数のアピールや論文を出していることでも証明される<sup>4)</sup>。

## 註

1) 『フランス語フランス文学研究文献要覧』、日外アソシエーツ 1993—2009

『20 世紀文献要覧大系、11—H、フランス語フランス文学研究文献』

日本フランス語フランス文学会編集、1979—1992

『20 世紀文献要覧大系 11、フランス文学研究文献要覧』、1945—1978

2) アルベール・カミュの以下の諸作品を次のように略記し、ページは直接（ ）内に示す。

I : Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

II : Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome II, 1944-1948, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

III : Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome III, 1949-1956, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2008.

IV : Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome IV, 1957-1959, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2008.

T : Albert Camus, *Théâtre Récits Nouvelles*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1967.

なお、カミュの作品に限らず、邦訳のあるものについてはそれを参照した。又、引用文の下線は全て播磨による。

3) Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne Véron, Seuil, 1978, p.633.

4) 高島正明は、「引き裂かれたアルジェリア」*L'Algérie déchiré*、(「レクスプレス」*l'Express*、1955, 10, 16) に続く記事や『カミュ全集 8』に収録されている時事論文には、いかなる形にせよ圧政と弾圧に抗議するカミュの姿勢が一貫して貫かれていると述べる。(『カミュ全集 8』 p.278)

資料『一テロリストの回想』の第二章と『正義の人びと』の比較

	『一テロリストの回想』第二章	『正義の人びと』
作者・形式	ボリス・サヴィンコフ・個人の回想	アルベール・カミュ・戯曲
背景・場所	1905年セルゲイ大公暗殺事件・モスクワ	1905年セルゲイ大公暗殺事件・モスクワ
所 属	「人民の意志」の最小グループ「戦闘団」	「人民の意志」の最小グループ「戦闘団」
登場人物	私(サヴィンコフ), <u>シヴェイツェル</u> , <u>ドーラ</u> , <u>ウラジミル</u> , <u>カリヤーエフ</u> , <u>ドゥレーボフ</u> , <u>ポリシャンスキー</u> , <u>モイセーエンコ</u> , <u>イワノフスカヤ</u> , <u>タチヤーナ・レオンチェワ</u> , <u>クリコフスキー</u> , <u>弁護士ジダーノフ</u> , <u>マリヤントーヴィチ</u> , <u>ゼンズィーノフ</u> , <u>ピョートル・モイセーヴィチ・ルーテンベルク</u> , <u>大公夫人エリザヴェータ・フョードロヴナ</u> , <u>弁護士モダーノフ・マンデリシタム</u> , <u>神父フロリンスキー</u> , <u>死刑執行人フィリップ</u>	アネンコフ(リーダー) ドーラ <b>ステパン</b> <b>ヴォワノフ</b> カリヤーエフ(主人公) 死刑執行人フォカ 看守 <b>警察長官スクラートフ</b> 大公妃エリザヴェス
具体的出来事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大公の監視活動</li> <li>・投弾者=カリヤーエフ</li> <li>・暗殺決行の時、馬車に大公妃とパーヴェルの子どもたちを発見</li> <li>カリヤーエフの手は爆弾を投げる態勢。</li> <li>・カリヤーエフは爆弾を投げなかった。「子供を殺すことができるだろうか」「僕の行動は正しかったと思う」</li> <li>・私「非難しないどころか彼の行動を高く評価」</li> <li>・ドーラ「詩人はそうしなければならぬ様に行動したまでです」</li> <li>・二日後、カリヤーエフは一人で大公暗殺を実行「私たちが殺した」とドーラ</li> <li>・カリヤーエフ投獄される。</li> <li>・大公妃エリザヴェスと面会…会見が非常に歪曲した記事で報道される。</li> <li>・カリヤーエフの告白…手紙。<u>大公妃の告発。権力に寝返りを強要されたこと。子どもに投弾しなかった正当性を綴る。</u></li> <li>・裁判 見事な意見陳述…テロリズムと自分達の活動の正当性を詳細に報告</li> <li>・カリヤーエフの処刑</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大公の監視活動</li> <li>・投弾者=カリヤーエフ</li> <li>・<b>革命闘士ステパンの帰還</b>。投弾を熱望</li> <li>・暗殺決行の時、馬車にパーヴェルの子どもたちを発見</li> <li>カリヤーエフの手は爆弾を投げる態勢。</li> <li>・カリヤーエフは爆弾を投げなかった。「僕にはどうしてもできなかつた」</li> <li>・<b>ステパンとカリヤーエフの対立</b></li> <li>・<b>ステパンと仲間の対立</b></li> <li>・グループは全員カリヤーエフを支持した。</li> <li>・<b>ドーラとカリヤーエフが愛を交わす場面</b></li> <li>・二日後カリヤーエフはセルジュ大公を暗殺。「私たちが殺した」とドーラ</li> <li>・カリヤーエフ投獄される。</li> <li>・<b>警察長官スクラートフが恩赦を求めるよう誘う。</b></li> <li>・大公妃が神の加護を与えに来る。面会が非常に歪曲した記事で報道される。</li> <li>・<b>カリヤーエフの処刑の詳細とテロリストたちの反応</b></li> </ul>
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループは「睦まじく結びついた一つの家族をなしていた」「モスクワでの暗殺計画の素晴らしい成功の原因を組織のメンバー相互の緊密な結びつきにあった」『テロリスト群像』(p. 106)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドーラとカリヤーエフが愛を交わす場面が主に第三幕にみられる。</li> <li>・彼らのグループは血のつながった兄弟のように結びついていて、ステパンも最終的には真の兄弟となる。</li> </ul>

ゴシックはカミュが『正義の人びと』で新たに書き加えた部分で、下線部は割愛した箇所である。

## Camus *Les Justes*

### À propos des ajouts aux *Souvenirs d'un terroriste* et de leur signification

Chizuko HARIMA

Camus a écrit *Les Justes* d'après *Souvenirs d'un terroriste*. Si l'on compare les deux œuvres, on se rend compte que certains passages ont été omis et d'autres ajoutés dans *Les Justes*. Nous voulons surtout évoquer ici les raisons qui ont poussé Camus à ajouter quatre nouvelles parties.

#### 1. L'apparition du personnage Stepan

Si Stepan n'apparaissait pas dans cette œuvre, Camus ne pourrait exprimer ses deux idées phares : l'importance d'être solidaire face à la violence et le refus de tuer des enfants.

#### 2. La scène où Kaliayev et Dora parlent d'amour

Grâce à cette scène, il parvient à montrer que même dans ce monde cruel et impitoyable, les héros peuvent en réalité être tendres et affectueux.

#### 3. La scène où Kaliayev reçoit Foka, Skouratov et la Grande-Duchesse

Cette scène montre le visage noble d'un Kaliayev qui ne renie pas ses convictions, supportant la critique des représentants de chaque couche sociale (le peuple, le pouvoir et la religion).

#### 4. La scène dans laquelle l'exécution de Kaliayev est évoquée

Kaliayev accepte la mort avec détermination et est exécuté dans l'honneur. Son comportement conforte Dora et ses frères dans leur décision de le suivre.

Ainsi la première scène permet à l'auteur d'affirmer ses idées tandis que les trois autres scènes, en montrant un amour impossible et des héros qui ne se renient jamais, font de cette pièce une tragédie. En peignant la réalité de révolutionnaires qui, conformément à ses propres opinions, affirment la nécessité de la solidarité et le refus de l'infanticide, Camus a donc créé avec *Les Justes* une œuvre universelle.